

中高生とともに差別と闘う

『AKI 38』と『3S』

吉成タダシ



「西日本の問題」ではない!

「大学を卒業後、横浜の会社に入社した時、社長が私の所属する部署にやってきて、急に「みんなの身辺調査をしようと思うのだがどうだろうか?」と、私の直属の上司に相談に来ました。私は、また顔は平静を装っていたけれど、髪の毛で隠れていた耳は真っ赤になり、背中からはタラッと流れ落ちるものを感じながら、パソコンを打って手ががすかに震えるのを必死でおさえていました。しばらくして腹が立ってききました。社長に、そして自分に。

何にも悪いことしてないのだから引け目を感じることはない。堂々として。これで何か言われたらこつちからこんな会社辞めてやるって思いました」

この職場のことを知らない私が決めつけて言うわけにはいきませんが、もし職場に、思ったことが言える空気、何を言っても受け容れてもらえる空気があれば、一方的に関係を断ち切るような関係にはならないように思います。

部落問題は、関西を中心とした「西日本の問題」と言われることがあります。実はこれ、私も正面切って言われたことがあります。以前、道徳教育の会で東京へ出かけたときのこと。その場には、全国から道徳教育に真摯に取り組んでいる方々がたくさん来られていました。たまたま隣においでた方が私の方を向きおっしゃいました。

「あなたは何をテーマに取り組ま

れているのですか?」

「どこまで伝わるのだろうか」と、ためらいながらも、「部落問題です」と答えると、サラッと一言。

「それは西日本の問題ですよね」

「あー、これか。…」全身の力がスッと抜け落ち、自分という形のまま一瞬にして真っ白な灰となり、音も立てずに崩れ落ちていくような感覚になりました。

「この会に参加している人たちは、みんなこんな意識で参加しているのか?」

その人としが話していいのに、その場にいるみんなが同じ意識であるかのような錯覚に囚われてしまいました。若かった当時の私にとっては、本当にショックな一言でした。

部落問題は、決して西日本の問題なんかではありません。「都会は地方出身者の集まり」と言われるように、私の親戚だって、東京や神奈川、千葉、埼玉で暮らしています。人が日本全国、いろんな理由で住まいを変えて暮らしているのは当たり前のことです。

数十年前、横浜で暮らしている親戚が、私の両親にこんな問い合わせをしてきたことがあります。

「うちの会社の部下が結婚を前提におつきあいしているんだけど、相手が部落出身かどうか教えてほしい」

まだ部落問題への認識が低かった我が家は、丁寧に答えたようです。

東日本に部落差別はないでしょうか? あるのに見ようとしてないだけではないでしょうか? 単に、問

題意識が低いだけではないでしょうか? もし「ない」と言うのなら、個人としてだけでなく、そう言ってしまう社会の空気に、私は危機感を覚えます。たとえ見えなくても、「ない」こととしてほしくない、まず見ようとしてほしい、そう思うのです。

「AKI 38」と「3S」

「私は完全に忘れていたことがありました。対話です。今まで逃げばかりでした。部落問題について自分が勉強してきたことを相手に聞いてもらおうとする行動が全くなかったのです。いつもその場をなんとかやり過ごすことしかできませんでした。結局、社長は調査をしたのかはわかりません。私は、仲のよい同僚たちにも打ち明けることはできませんでした」

やっと出てきました。ここで「対話」について言及しています。中学時代には繰り返し繰り返し学習を重ねてきた「対話」が、それ以降生かしかれていなかったというのです。しかしこれは私自身にも言えることです。本当に言わなければいけないとき、言うべきときに、言うべきことがちゃんと言えてきたか。

友達との関係性について子どもたちには話をすると、よく「AKI 38」と「3S」の話をします。

「AKI 38」とは「A:あとで」「K:かげで」「I:いやらしく」「38:ウソを」言うことです(ウソと言えば大袈裟かもしれないので、「本当かどうか分からない不確かなこと」と

でも解釈してもらえればと思います)。これをしてしまうから、人間関係がこじれ、壊れる。

そうじゃなくて「3S」、「S:すぐに」「S:その場で」「S:スナオに」言うことが大切だということです。特に「スナオに」言うことの大切さ。悪意が混じると、どうしても人は、「いやらしく」言ってしまうがちになります。でもそうではなくて、取って感情を排して、「スナオに」伝えることが大切だということです。言葉に混じり込んだ感情が好意であれば、それはそれとして伝わるし、悪意であれば、やはりそれはそれとして伝わってしまうのだと思います。だから、それを乗り越えて、「スナオに」言う。こんな「対話」ができる自分になっていくことではないかと思うのです。

とはいえ、「対話」を諦めないということは大切なことですが、本当に大変なことだと思います。だから、彼女が中学時代から引き続いて「対話」を積み重ねられなかったことを、「ダメじゃない!」なんて言うことは私にはできません。かといって、「そうだね、できないよね。だからできなくてもいいんだよ」と言うつもりもありません。何が正しいのかは知っています。だけど、いつもいつもその正しさにもとづいて行動はできない。それが人間ののだと思います。正しさを貫こうとする気高さと、それを貫けない弱さを合わせもった存在。それがきつと人間なのです。(次回「これは、命を守る教育」)